

『古代アメリカ』4, 2001, pp. 101-110

<コメント>

## 語り継がれる神話、記録された神話、描かれた神話

—落合一泰氏のコメントを受けて—

杓谷茂樹

(総合研究大学院大学)

本誌第3号に掲載された拙稿「太陽と月の神話 - 古典期マヤの神話理解に向けての予備的考察」に対し、落合一泰氏よりコメントを寄せていただいた。以下では、このコメントを受けるかたちで、やや混乱気味の自らの考えを整理し直すことで、落合氏への応答に代えさせていただきたいと思う。

まず、この研究の対象となる神話を、「語り継がれる神話」と「記録された神話」、そして「描かれた神話」の3つに整理しておきたい。「語り継がれる神話」はまわりの社会関係やパフォーミングな側面を含む「軟らかい」ものだが、これに対して「記録された神話」はエリアーデ流には非神話化、あるいは再神話化されたものであり、落合氏の言葉に従えば「硬化」されたものということになる。そして「描かれた神話」の場合、描くという行為の多重性は今では不明なことが多く、本来は「軟らかさ」をもっていたとしても、現時点では「硬化」した情報を取り出すしか方法はない。

ところで、本論文における取り組みは、私が古典期マヤの図像研究を進めてゆこうとする際に、その手がかりを神話に求めるところから始まったものである。この方向性自体は古代マヤ研究ではごく普通に行われているものではあるが、実際行われていることといえばマイケル D. コー、カール A. タウベといった欧米の第一線の研究者でさえ、古典期の図像を解釈するにあたっては、いとも簡単に『ポポル・ヴフ』、そして現代の神話のエピソードを、何の手続きも経ることなくそのまま当てはめている。私はその安易なやり方に疑問を持ち、その作業に理論的、方法論的根拠を提示してゆく必要性を強く感じたのである。

この理論的、方法論的根拠の提示を試みるにあたって、依拠しようとまず考えたのがレヴィ=ストロースの神話研究である。『ポポル・ヴフ』とモパンの「太陽と月と金星の伝説」を比較しながら読んでゆく際に、互いに似かよった要素がそれぞれ階層的に構成される中で、順番が入れ替わったり、時に一体化したり分裂したりする様子を見て取ることができ、それがレヴィ=ストロースの考えにぴったりはまったと思ったからである。結果としてこれが最後まで尾を引くことになった感否めず、落合氏のアドバイスに従い、今後は比較神話学の方法論もしっかり押さえてゆかねばならないと考えている。

だが、いずれにせよ「記録された神話」同士であれば、比較的容易に比べることができたのであるが、「記録された神話」と「描かれた神話」との比較となると、とたんに困難な状況に陥ってしまった。「描かれた神話」を扱おうとするときには前提としなければならないことがある。それは絵画イメージの解釈の問題である。そこに登場する神や人物、あるいは動物といったキャラクターは何なのか、そして画面の中で何が行われているのかを認定すること、これができて初めて「描か

れた神話」として研究の俎上に載せることができるのである。「描かれた神話」を「記録された神話」との比較のために提示することは、この研究を進めてゆく上で最初に行わねばならない作業のひとつであるが、「記録された神話」から「描かれた神話」をどういったかたちで理解してゆくべきかという問題と合わせ、「可能態を現実化する論理的展望と具体的な方法を示したうえで、結論を導く」ことができなかつたことは、落合氏のご指摘の通りであり、私自身、本論文の最大の弱点と認識している。

ところで、「神話を語り継ぐ」という文化行為に対する関心は、本研究で対象とした現代の神話、征服直後の神話、古典期の神話を時系列上に一直線においたときに、それぞれの類似点、相違点だけに注目するのではなく、その時系列上での文化伝達のダイナミズムを意識しようとしたことからたどり着いたものである。ただし、本論文ではこの「語り継がれる神話」というもののあり方の理解について、やはりレヴィ＝ストロースに依りすぎたがために、随分と片手落ちとなった点は認めざるを得ない。

木村秀雄氏は現代のアマゾン地域のエセエハの神話研究の中で、神話を形作っている要素の変化についての考察を行っている。そこで彼は、ミハイル・バフチンの「対話」という言葉を用いて、神話テキスト同士の対話、語り手とキャラクターの対話、語り手とその人物が属する文化や社会のシステムとの対話という神話の3つの位相を提示しながら、神話の語りは自由である一方で、常に様々な拘束がかかっていることを指摘している [木村 1996: 238-242]。

本論文では「神話を語り継ぐ」という行為の中で、その語り継がれる神話の、神話テキスト同士の対話や語り手とキャラクターの対話という語りの自由な側面については考慮してきたつもりだが、一方で最後の語り手とその人物が属する文化や社会のシステムとの対話という語りを拘束する側面が軽視されていたことは否めない。そして、落合氏がコメントの冒頭で文化の軟硬について言及し、「神話を語り継ぐ」ことが社会関係やパフォーマンスな側面を含む軟らかい文化行為であると述べたとき、神話が「対話」であるという認識の仕方、そして特にそこで軽視されていた語りを拘束する側面の重要性をあらためて気付かされることとなった。本研究はレヴィ＝ストロースの神話研究を読むところから始まったといってもよいが、神話のダイナミズムを考えようとするれば、やはりレヴィ＝ストロースにいつまでも縛られることなく、別の新たな視点の導入を検討してゆく必要があるだろう。

本論文は、落合氏が「循環」、あるいは「閉塞状況」という言葉で表現しているように、私が古典期マヤの図像研究に神話を手がかりとしてアプローチしようとした際に、「記録された神話」と「描かれた神話」、そして「語り継がれる神話」の間で、何度も壁にぶつかり、つまずき、もがき苦しんでいる様子がそのまま形になってしまった様なものといえるかもしれない。どこか自分自身で整理のつかない中であって、落合氏の「現代、征服直後、古典期を統一的な視点からとらえる比較神話学的分析法の錬磨」と「神話を語り継ぐ」という社会関係やパフォーマンスな側面をふくむ軟らかい文化行為へのアプローチ」は分けて考えるべきという指摘は、私にとっては啓示であり、大きな収穫であった。今後、議論のベクトルをしっかりと見据えて一歩ずつ研究を進めてゆきたい。

## 参考文献

木村秀雄

1996 『響き合う神話－現代アマゾニアの物語世界』世界思想社